生涯学習・キャリア教育研究センターの歩み

寺田盛紀（センター長）

研究センターの発足

2004年10月1日付けで当センターが発足した。そのときからセンター長である筆者は、本誌創刊号（2005年3月）の巻頭に以下のような文章を記している。長くなるが、そのまま再掲する。

「生涯学習・キャリア教育研究」発刊に寄せて

昨年10月1日づけで、本センターが発足した。1997年以来、つまり大学と経済界との間の、いわゆる「就職協定」が廃止されて以降、当学部・研究科においてもインターンシップに取り組み、また、学部や研究科の将来構想とも関わって、社会教育学や職業（産業）教育学領域が中心になって、「人材開発科学」領域を設置したり、生涯学習やキャリア教育を主唱してきたことが背景にある。とまれ、その両領域に加えて、インターンシップ・就職支援、スポーツマネジメントに関する名古屋大学内の関係者の協力も得て、当センターは設置されたのである。

センターの目的は、名古屋大学のいわば文系の産官学地域連携センターを目指すものであるが、全国的にもこの分野の研究拠点形成を計ることである。そのために、企業人事関係者、高校教育関係者、そして近隣大学の専門家にも研究員として参加していただき、研究の推進をはかりつつある。

研究拠点形成に欠かせないのは、情報と研究成果の集積・蓄積である。たいそう欲張った計画ではあるが、当センターは3種の刊行物発行を予定している。1つは学術的、開発的研究成果を『生涯学習・キャリア教育研究』として、2つ目がセンターの各種事業の実践報告を随時連続的に発行する、『モノグラフ・調査研究報告書』、そして3つ目がセンター内の意志疎通を図るための『ニューズレター』である。

本誌本号は、もちろん『生涯学習・キャリア教育研究』の創刊号であり、今後のセンターの活動強化を期しての刊行である。今後のご支援を期待するものである。

2005年3月

名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属 生涯学習・キャリア教育センター長

寺田盛紀

目的の部分に論及されているが、「文系の産官学地域連携センター」を名古屋大学でつくることを熱望していた当時の牧野教授（その後、東京大学に転任）と同じく名古屋大学にキャリア研究センターを創設したかった筆者の合作であった。それ以前、通常授業にシニアや主婦の方々など「市民研究員」に入ってもらい、また一般学生との学修交流を行い、文系ではじめてのインターンシップの模索や単位つきのその導入などの取り組みが背景にあった。全学組織にすることはままならず、というより本部筋から相手にされず、やむなく部局内で設置することになった次第である。

その後の活動

上記のセンター設置時の目標に沿って、その後の活動を振り返ってみたい。

まず、研究活動である。センターとしての統一研究テーマを設定できなかったけれども、キャリア教育部門、インターンシップ部門を中心に、筆者が長く主宰していた「名古屋産業教育研究会」との共催で毎年2~3回の定例研究会を開いてきた。最近あいまいになっているが、主として愛知県内の高校教員、我が学部OBの方々、近隣の私立大学のキャリア関連の教員の方々などが集い、今日まで継続している。部門構成に関しては、やや後に、本学総合保健体育科学センターの教員の方々にも参加いただくようなことも行った。

他方、これは主に教員の範囲ではあるが、本誌の刊行を休まず続けてきた。途中、無理な編集をして、幾度かトラブルを起こしたこともある。紀要発行には、技術的なこと、そして情報化社会におけるルールの遵

守など、様々な配慮が必要なことを学んだ。ともあれ、本誌は今号で第12号、つまり12年間続いていることになる。

研究活動と並ぶもう1つの重要な柱が、対学生サービスの活動である。その1つは設置前から取り組んでいた学生のインターンシップに対する支援である。当初は元教授の田中宣秀教授、そして本学部OBの山田徳男講師、後に西孝雄講師、さらに牧野正人特任准教授、現在は大西隆信講師などがこの仕事に貢献してくださった。

もう1つの学生サービスとして、平成23（2012）年度から、就職相談部門も置き、金井教授と筆者が相談活動をするということもあった。この仕事は2年後、片手間でなく、やはりそれを専任的にやるのが好ましいということで、ここ3年ほど上記大西講師が担当している。

また、平成18（2005）年度から20（2007）年度までの間、名古屋大学の文部科学省の受託事業である「現代GP実践的総合キャリア教育プログラム」に採択され、「専門教育型キャリア教育体系の構築」に本センターを上げて取り組んだこともある。GP申請前後、金井教授には多いに奮闘していただいた。筆者は、時限の「名古屋大学GPキャリア支援・教育開発センター」の長も兼務し、他の研究員の方々とともに、名古屋大学の各学部にキャリア科目やインターンシップ、そして通常授業の中でのキャリアの取り組みを普及させようと努めたのである。あまり、画期的な成果を上げることはできなかったけれども、柴田現教授、坂本当時PD、船津助教などがその中心になり、「名大版ポートフォリオ」を制作し、名古屋大学の全学生に配布することも続けてきた。その効果確認のための検証作業として、昨年9月、久しぶりの本センターの「モノグラフ」第7号に報告書を刊行している。

今後に期待する

以上のようなことが当センターの発足とその後の経緯である。最後に、筆者自身は定年退職のため参加できないのであるが、今後の活動について期待することを述べて締めくくりにしたい。

1つは、やはりこのセンターの活動が地道に継続されることである。そのためには、関係教員としては、2足も3足もの草鞋を履かねばならないけれども、中堅、若手の教員の積極的関与を望みたい。

もう1つは、当初目的としていたように、粘り強く、全学のセンター化の努力が必要であろう。大学全体としては、学生相談総合センターに任期つきの助教が1人しかこの分野の専任教員がいないという状況が続いている。

さらに、近年、ますます、キャリア関連の大学教員の確保と養成が必要になっている。にもかかわらず、とくに国立大学が法人化されて以降、新規機関の増設が望めなくなっている。本研究科には、心理科学部門のキャリア心理学や教育科学部門の教育方法学、カリキュラム学、教職学部門、そして私が残していく職業・キャリア教育学部門がある。日本全体のキャリア教育の大学教員養成や研究者養成を研究科、当センターのミッションにすることがあってもよいのでは、と期待する。